

国立国語研究所学術情報リポジトリ

The Reading Process of Advanced Japanese Learners in China : Reading Instructions that Promote Dialog with Authors

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-01-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 砂川, 有里子, 朱, 桂榮, SUNAKAWA, Yuriko, ZHU, Guirong メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003091

中国語を母語とする日本語上級学習者の読解過程

——書き手との対話を促す読解指導に向けて——

砂川有里子^a 朱 桂榮^b

^a 筑波大学名誉教授／国立国語研究所 研究系 日本語教育研究領域 客員教授

^b 北京外国語大学 北京日本学研究中心

要旨

書き手との対話を通じて読み手自身が思索を深められるような読解指導のありかたを考えるには、学習者が日常的にどのような読み方をしているのかを分析し、そこに潜む問題を明らかにする必要がある。本稿は、大学院で学ぶ上級レベルの中国人日本語学習者6名を対象に、「テキストベース」と「状況モデル」に関わる活動 (van Dijk & Kintsch 1983) が、読解過程でどのように行われるかを調べる調査を行った。この調査では、書き手との対話を促し、自己の思索を深めることを目指し、いくつかの設問を与えたあとに読解を開始した。その結果、テキストベースと状況モデルに関わる活動を活発に行っている3名と、テキストベースに関わる活動が主体で、状況モデルに関してはあまり活発な活動が見られない3名に分かれた。つまり、6名のうち半数の学習者が書き手との対話を通じた深い思考に至る読み方に至っていなかった可能性がある。このことから、事前に設問を与えるだけでは十分でなく、読解の目的や設問を与えることの意味を十分に理解させ、設問の内容を考えながら読む練習を行うなど、読解過程における読み方そのものの指導が、日本語上級レベルの大学院生であっても必要であることが示唆された*。

キーワード：読解過程、書き手との対話、テキストベース、状況モデル、読解指導

1. はじめに

優れた読み手とは、テキストの内容を理解するだけでなく、自分の知識を用いた推論を駆使して書き手の気持ちや伝えたいことを理解しようとし、同時に、書き手と自分の考えをすりあわせ、自分の考えを変容させたり深めたりできる者、つまり、書き手との対話を行いながら思索を行える者であると言えるだろう。バフチンが述べたように、言語とは「発話によって実現される言語的相互作用という社会的出来事」なのであり、読み書きという行為も「なにかに答え、なにかに反駁し、なにかを確認し、可能な答えと反駁を予想し、支持をもとめたり等」の、いわば「大きな尺度のイデオロギー的対話」のなかに位置づけられるものである (バフチン著・桑野訳 1989: 145–146)。

砂川 (2015) は「書く」という行為に着目し、読み手との対話を成り立たせる言語表現とそれらの機能について論じ、アカデミック・ライティングの指導法に言及した。本稿では、「読む」という行為に目を転じ、書き手との対話を通じて読みを深める読解指導を考えるための基礎研究

* 本稿は、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」(プロジェクトリーダー：石黒圭)の研究成果の一部である。本稿の内容は竹園日本語教育研究会で発表し、有益なご意見を頂戴した。参加者のみなさんに感謝いたします。

という位置づけで読解過程の調査を行った。本稿の構成は以下の通りである。まず、2節で読解過程の認知活動に関する先行研究と日本語教育の読解指導の研究を概観し、本稿の目的を明確にする。3節で読解過程の調査について、課題と手順を述べ、数量的な調査の結果を報告する、4節で調査結果を踏まえた質的な分析を行い、学習者が読解の過程で実際にどのような活動を行っているのかを記述する。5節で事前に与えた設問の効果を検討し、学部や大学院レベルでの上級日本語学習者に対する読解指導のありかたについて考える。

2. 読解過程の先行研究

2.1 読解過程の認知活動

内田（1982）は、テキストの読解は、「文章情報そのものの移しかえではなく」「受け手の知識や、その知識の働かせ方によって、文章の要素間の関係構造が組織化され、ある種の変形や単純化、一般化がともなう」ものであり、「時々刻々これが変容する可能性を含むもの」と述べ、そのモデルを構成する過程の背後に3つのモニター機構が存在すると述べている（pp. 162-163）。それをまとめると次のようになる。

- ① 一貫性：文章を“理解”しようとする。正確に、早く、それなりに一貫性のある構造を構成しようとする。
- ② 最適性：自分の目標や課題認識、動機、視点に^マ合^マせて、それに最適な構造を構成しようとする。
- ③ 開放性：他の知識を照合したり、一度構成したモデルからまた新たな問いや矛盾を発見し、それを解消しようとして、理解をさらに深めていこうとする。

このように、人がテキストを読むとき、テキスト上に存在する言語的な手がかりに基づくボトムアップ処理だけでなく、推論など高次のレベルから行うトップダウン処理が行われる。その処理は読み手の持つさまざまな知識の影響を受け、読み手の目的や視点に応じた再構築が行われ、それに対する疑問や問いかけを通じて理解がさらに深化する。読み手が行うこの種の能動的なテキスト理解のモデルとして、van Dijk & Kintsch（1983）は「テキストベース」と「状況モデル」という2種のモデルを提唱している。テキストベースとは、テキストに含まれる命題と命題同士の関係性に即して構築される心的表象のことを指し、状況モデルとは、テキストベースを読み手自身の既有知識と照らし合わせながら解釈したり精緻化したりして構築される心的表象のことを指す。読み手の理解はテキストベースと状況モデルとの絶え間ない往還によって深められるのである。

van Dijk & Kintsch（1983）は、さらに「学び（learning）」について触れ、状況モデルは学びの基盤を形作るものとして不可欠な概念であり、状況モデルの変容（modification of situation models）として学びを概念化することが望ましいと述べている（p. 342）。読解が契機となって生じる読み手の思索というものは、この学びから出発し、読み手の心的表象にさらなる変容を生じさせ、新たな学びに至る認知活動であると言えるだろう。本稿の筆者らは、状況モデルの変容が

活性化される深い読みによって読者自身の思索を深めることこそが、読解指導の最終目標であると考える。

以上に述べた認知心理学や心理言語学の研究は、日本語教育にも大きな影響を与えている。館岡（2001）は、読解過程で学習者が行う自問自答に着目し、発話思考法を用いたプロトコル分析により、読解力の高位群、中位群、低位群の自問自答を比較した。その結果、高位群は既有知識を動員した推論を必要とする「グローバルな問い」が多いのに対し、低位群は未知語の意味などを問題とする「ローカルな問い」が多いことが明らかになった。また、菊池（2006）は、読解力が高い学生はモニターを使って自分の読みを把握しながら読み進め、「説明→精緻化」、あるいは「再読→保留→推測→精緻化」といった「ストラテジー連鎖」が観察されることを報告している。

2.2 読解指導の研究

このような高度な読解力を身につけさせるための読解指導は様々に試みられている。そのひとつが設問の提示である。館岡（2001）は読解の後に設問を与えることが学習者の理解促進に有効となる可能性を指摘し、山田（2016）は読解の高次処理を促すためには、テキストの広い範囲で意味を統合させる設問を与えることが有効であると述べている。

一方、柏崎（2010）は、他者に対する伝達目的を持つことが相手の理解を考慮した状況モデルの構築と産出を促進すること、さらに、徐（2015）は他者に対する伝達目的を持つことにより内容理解だけでなく、内容の長期的な保持も促進される可能性が高いことを述べている。

以上のように、高次の処理を学習者に身につけさせるための試みはさまざまになされている。しかし、具体的な指導を考えるにあたっては、学習者の日本語能力、学習動機、専門領域、個人的な嗜好など、さまざまな要因を考慮しなければならない。また、多様に属性の異なる学習者がそれぞれどのような読み方をしているのか、彼らの読解過程のどこにどのような問題が潜んでいるのか、その実態を知る必要がある。

2.3 読解過程の記述

読解過程を観察し、学習者の読み誤りの解明を試みる研究として藤原（2017）、野田ほか（2017）、野田（2019）、野田編（2020）などが挙げられる。これらにおいては、発話思考法による読解の過程で調査者が疑問に思ったことを協力者に適宜質問するという方法を用い、読解時に学習者が抱える問題を、語、文構造、文脈、背景的知識といった観点から考察している。

一方、読解における批判的思考に着目した研究では、ピア活動による学習者の意識変容の記述が試みられている。霍（2015, 2016）は、学習者の「自己との対話」「学習者同士の対話」「教師を交えた全体の対話」という「三つの対話」によって、正確な理解と批判的な読みに関わる意識がどのように変わっていくかを分析している。また、楊（2018）はピア・リーディング授業における「自己との対話」「他者との対話」「全体との対話」によって学習者の批判的思考がどのように活性化するかを分析している。これらの研究では批判的思考の認知技能が、自己や他者との対話を通じて総じて活性化されるものの、十分な活性化に至らない場合があることも示されている。

このように、種々の状況下における学習者の読解過程の実態を知り、そこから問題を抽出し、その改善点を探ることは読解指導を考える上で避けてはならない重要な作業である。そこで本稿では、学習者が日常的に多く行っていると思われる「自分1人の力でものを読む場合」に着目し、1人で読解を進める過程で、書き手や自分自身との対話により自己の思索を深める批判的な思考が、どのような形でどの程度行われるのか、また、個々の学習者によってそのありかたがどのように異なるのかを数量的に調査する。本稿の目的は、この調査結果の分析とそれをもとにした質的な考察を行うことにより、思索を深める読解指導のための基礎的な知見を得ることにある。

3. 数量的な読解調査

3.1 調査の課題

高度な日本語力を身につけ、学術的な活動に携わるような学習者であっても、思索に繋がる読解の力が十分に身につけていないと感じられる場合がある。そこで本稿では、調査対象を上級レベルの日本語力を有する大学院生に設定した。調査の課題は以下の通りである。

上級レベルの日本語学習者が比較的易しいテキストを読み解くとき：

- ① 読解過程において、テキストベースと状況モデルに関わる発話がそれぞれどの程度の頻度で行われ、学習者によってどのように異なるか。
- ② 時系列に沿って進められるテキストベースと状況モデルに関わる活動のありかたが、学習者によってどのように異なるか。
- ③ 事前に与えた設問は、読解過程で状況モデルに関わる活動を促すのに役立つか。

3.2 調査の概要

調査の実施時期は2018年1月、協力者は中国国内の大学院で日本語学や日本語教育を専攻する修士課程の1年生6名で、調査は自由参加の課外活動として行った。表1に協力者のプロフィールを示す。

表1 協力者のプロフィール

協力者	性別	日本への留学経験	年齢	母語	日本語能力試験
A	男	12ヶ月	20代	中国語	N1合格者
B	女	6ヶ月			
C	男	12ヶ月			
D	女	なし			
E	女	12ヶ月			
F	女	12ヶ月			

2.2節で述べた読解指導の先行研究において、他者への伝達意識と設問の提示の有効性が示されていることから、本稿では、他者に対する伝達目的を与え、読解時に書き手の言いたいことを理解し、書き手との対話を促すことを目的として、読解を開始する直前に中国語による設問を提示した。以下はその日本語訳である。

- 1) 書き手は何を言おうとしているのですか。
- 2) それはテキストのどこから分かりましたか。
- 3) 書き手と話し合う機会があるとしたら、あなたは書き手にどんなことを言いたいですか。
- 4) この文章を読んだことのない人と分かち合いたいことは何ですか。

調査者はこれらの設問を読み上げ、協力者各自にメモを取らせたのち、読解が終了したあとにグループ討論の時間を持つことを伝えた。また、グループ討論では設問についての話し合いも含むよう指示した。グループ討論の発話データも整備されているが、本稿では「自分1人の力でものを読む場合」についての考察が目的であることから、読解時の発話データのみを分析する。なお、協力者に対する説明や指示はすべて中国語で行った。

読解に用いたテキストは、語彙や文法などの解説にわずらわされず、できるだけ内容に集中することができるように、平易な日本語で比較的内容が分かりやすいエッセイ集から選定した。調査時には、協力者に対して、テキスト全文のほかタイトルと出典も提示した。以下にテキストの概要を示す¹。

1. テキスト：「ペットと人間」（坂東真理子『錆びない生き方』講談社 2010 年）
2. 総字数：タイトルを除き、1,285 字
3. 文章構造：全部で7段落から成り、次に示す起承転結の構造を持つ。

【起】 友人がペットロスからようやく立ち直った。

人には愛情の対象が必要だ。(409 字)

【承】 先日、癒やしロボットを見て考えさせられた。

本当の癒やしは人間から得られると考えていたが、
ロボットのほうが忍耐強いし忠実だ。(834 字)

【転】 「その代わり（人間は）思いがけなく崇高なことも行います。」(21 字)

【結】 「私はもう少し人間に期待をしたいのですが…。」(21 字)

上記の【起】と【承】には要約文を示してあるが、【転】と【結】は本文で語られた文そのものの引用である²。これらの文字数を見てわかるように、テキストのほとんどは【起】と【承】で占められており、【転】と【結】は最後の段落の末尾で、それぞれ一文ずつによって示されるだけである。このように、このテキストは、起承転結の構造としては変則的なものである。本文で用いられている日本語は、日本語文章難易度判定システム「j-Readability」で判定した結果、「中級後半（やや難しい）」というレベルで、外来語が多用されていることを除けば、N1 レベルの学習者にとって「比較的やさしい」と感じるレベルのものである。調査を行うに当たって辞書の使用は禁止しなかったが、使用した協力者はいなかった。

読解の方法は、読解の過程で頭に浮かんだことをすべて言葉にして発声するというもので、協

¹ テキストの全文は巻末資料を参照されたい。

² 【転】の（ ）内は筆者らの補足である。

力者には中国語により、以下の指示を与えた。

読みのプロセスを調べるために調査を行います。理解の状況を確認するために、分かった意味と読みながら考えたことや心に浮かんだことをすべて声に出して、中国語で言ってください。

この方法は一般的な発話思考法と類似するやり方であるが、協力者が日常的に行っている読み方にできる限り近い読み方を促すため、読み方の指導や事前の練習はあえて行わず、時間制限もしなかった。すなわち、頭に浮かんだことをすべて声に出すこと以外は協力者の自由に任せるという点が、事前に練習して読み方の統制を行う一般的な発話思考法の調査と異なっている。

この方法は、一般的な発話思考法よりは自然で、普段の読み方に近い読解過程が観察できるという利点があるものの、問題もある。テキストの読み方を各自の自由に任せてしまったことにより、テキストを黙読する協力者を生じさせてしまったことである。音読した場合のデータは読解の過程で何が起きているのか観察しやすいが、黙読したデータの場合、休止（＝声が発せられない間）の際の活動がテキストの読みなのか内省的な思考なのかを特定できない。このような問題はありますが、「考えたことや心に浮かんだことはすべて声に出して言う」ということは念を押して明確に指示してあるため、黙読した者もその指示に従ったものと考え、音読・黙読の別を問わず分析することにした。読解調査に要した時間は表2の通りである。

表2 読解実験に要した時間

協力者	読み終わるまでの時間
A	16'40
B	11'15
C	21'17
D	8'59
E	15'09
F	15'07
平均時間	14'24

この表に示された通り、テキストを読み終わるまでに要した時間は、最長が21分17秒、最短が8分59秒と個人間のばらつきが非常に大きく、各自が自分のペースで読んだことが分かる。6名のうちEは読み終わったあとにもう一度最初から読み直している。表2のEの時間は2回の読解時間を合わせたものである。

以下においてはテキストを読み終わるまでの中国語による発話を文字化し、さらに日本語に翻訳したデータを分析する。

3.3 タグづけの単位

テキストを読み終わるまでの発話の過程を、そこで行われている活動という観点から観察してみると、未知語の意味を考えたり、書き手の意見に同意したり、書き手の意見に反論したりなど、

さまざまな種類の活動が行われていることが分かる。筆者らはそれらひとつひとつの活動に「語句」「同意」「批判」などのタグ付けを行った。タグ付けの単位は、句や文などの構造的な単位ではなく、完結したひとつひとつの活動に関わる発話である。例えば、(1) では下線を引いた文で、1 番目の文の内容に対する同意が表明されている³。

- (1) 次にまた、我々は人間として愛情を向けるものが必要なのだと言っている。確かにその通りだ。(C)

この場合はこの 1 文だけで「同意」というひとつの完結した活動を行っている。一方、(2) は、ペットの葬儀屋などペット向けサービスについて書かれた箇所を読んだ直後に、自分が過去に見聞きしたことを思い起こして語っている発話である。

- (2) この前、ペット向けの葬式は結構お金がかかるという話を聞いた気がする。結構高級だし、わざわざ土地を買うこともあるんだそうだ。(B)

この場合は複数の節に渡るかなり長い発話がなされているが、これら全体で自己の体験した見聞を語るというひとつの活動を行っている。そのためここではこの発話全体に「体験」というタグを付与した。このように、単位の長さは一定していない。

以上の方式でタグ付けを行ったあとに、これらの活動を「テキストベースに関わる発話」と「状況モデルに関わる発話」の 2 種に大別した。

3.4 テキストベースに関わる発話

テキストに使われた語句の意味や読みに関して述べたり、直前に読んだ内容に関する感想や同意を表明したり、直前に読んだ内容を自分自身の言葉で言い換えたりするなど、推論などの高度な認知活動を必要としない狭い範囲のテキスト理解に関わる活動を、「テキストベースに関わる発話」と認定することにした。以下に、テキストベースに関わるとした発話の種類と発話例を示す。

- ① 語句：語句の意味・読み方・文法やそれらの難易度についての発話。
 - (例 1) 「伴侶」という単語の読み方がちょっと…でも意味はちゃんと理解できる。(F)
 - (例 2) この文は簡単だ。(A)
- ② 感想：理解した内容に関する短い情緒的な発話や感情の表出。
 - (例 1) この最後の文はとても悲しい。(D)
 - (例 2) わ、すごい。(E)
- ③ 同意：理解した内容に同意する発話。
 - (例) どうりで悲しいわけだ。(B)
- ④ 換言：テキストの一部の内容を自分の言葉で言い換える発話。
 - (例) つまり、優しくしてあげれば優しくしてくれるし、悪く扱えばひどいことをされると

³ 用例末尾のカッコの中に協力者の ID を示す。

いうことだ。(B)

- ⑤ 要旨：テキストの一部のトピックを示したり，その部分の内容を要約したりする発話。
 (例) 今語っているのはこのロボットの性能についてだ。(F)

これらのうちの①「語句」は，テキストを構成する語句の意味理解には関わるが，テキストのメッセージを理解した上での活動とは言えない。それに対して②「感想」と③「同意」は，テキストのメッセージを理解したあとに，それに対する情緒的あるいは共感的な表明を行う発話である。これらは読み取ったメッセージに対する読み手の受け取り方を表すものではあるが，メッセージの内容を吟味したり，読み手の認識を変容させたりするものではない。④「換言」と⑤「要旨」は，テキストのメッセージを読み手なりの方法で再構築する発話で，これらも②「感想」と③「同意」と同様にテキストの内容を超えた理解を形成するものとは言えないが，テキストの内容を超えたより深い理解につながる契機となり得るという点で②や③と異なっている。

3.5 状況モデルに関わる発話

読解をきっかけに自分の体験を想起したり，書き手の意見に対する反論を述べたり，書き手の立場や心情に関する推論を述べたりなど，テキストベースでの活動を越え，読み手自身がすでに持つさまざまな知識に照らしてより深く内容を理解しようとする活動のことを「状況モデルに関わる発話」と認定することにした。以下にその種類と発話例を示す。

- ① 体験：自分自身の体験や見聞きしたことを述べる発話。
 (例) 私が以前日本にいたとき，ひとり暮らしをしたら，独り言を言うようになった。(E)
- ② 疑問：理解した内容に対する疑念や疑問を表明する発話。
 (例) しかし，ロボットはやはり人の代わりにはならない感じがする。(D)
- ③ 批判：理解した内容に対する反論や批判的な意見を述べる発話。
 (例) それはそうだけど，人間ってそういうものなもの。そうでなければ人間とは言えないんじゃない？(B)
- ④ 意見：書き手の発言に触発されて得られた自分自身のオリジナルな意見を開示する発話。
 (例) また，これは多分日本ならではの状況だと思った。(C)
- ⑤ 理由：自分自身の意見や反論などの理由や根拠を述べる発話。
 (例) なぜなら中国ではペット産業がまだ始まったばかりなのだから。(C)
- ⑥ 推論：書き手の立場や考え方についての解釈を推論として述べる発話。
 (例) ただ，書き手の人間に対する態度が変わり，多少批判的に見ているように思った。(C)
- ⑦ 展開：書き手の論の展開の仕方に対して感想を述べたり批判したりする発話。
 (例) しかし，ここまで読んで少し唐突に感じた。(C)
- ⑧ 全体確認：テキスト全体の内容を振り返り，論の流れを確認する発話。
 (例) 第一段落は，彼の友人がペットを亡くし，(中略)生身のもののほうがいいと思っている。(E)

⑨ 一般化：自分の意見を一般化して論じる発話。

(例) なんか日本人はタイトルをつけるといつもこうなるみたいだ。(E)

これらのうちの①「体験」は、自分自身の体験や、読んだり聞いたりした知識を思い起こすもので、実感を伴った理解に至るものであるが、テキストの内容そのものを批判的に捉え返す活動と直接には結びつかない。一方、②「疑問」、③「批判」、④「意見」、⑤「理由」、⑥「一般化」はテキストの内容を批判したり自分自身の意見を開示したりするという点で、読み手独自の思索につながる活動であると言える。また、⑥「推論」や⑦「展開」は書き手の立場や論の進め方に関する発話で、⑧「全体確認」とともに、広範囲に渡るテキスト理解やテキスト批判につながる活動である。

3.6 調査結果

表3はテキストベースと状況モデルに関わる発話の頻度をまとめたものである。各項目の数値のばらつきからも協力者は各自各様の読み方をしていることが分かる。

表3 テキストベースと状況モデルに関わる発話の頻度

協力者	(ア) テキストベース						(イ) 状況モデル										合計
	語句	感想	同意	換言	要旨	小計	体験	疑問	批判	意見	理由	推論	展開	全体確認	一般化	小計	
A	17	2	0	0	1	20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	20
B	4	15	7	2	2	30	4	3	5	6	3	0	0	0	0	21	51
C	8	3	9	9	1	30	3	1	3	12	5	3	1	0	0	28	58
D	2	4	4	1	0	11	2	1	1	3	1	0	0	0	0	8	19
E	6	7	4	0	1	18	7	3	3	11	1	1	2	1	1	30	48
F	5	4	0	1	5	15	1	0	0	1	0	0	1	0	0	3	18

次頁の図1は、「(ア) テキストベース」と「(イ) 状況モデル」に関わる発話の頻度を示したものである。

この図から、全体の頻度が48回以上のB, C, Eと20回以下のA, D, Fに大きく二分されることが分かる。また、48回以上の3名は状況モデルに関わる発話数が21回から30回と高い値を示しているが、20回以下の3名は状況モデルに関わる発話数がゼロから8回という低い値に留まっている。そこで以下の節では、彼らの読解過程においてどのような活動が行われているのか、テキストベースと状況モデルに関わる発話が多いグループと、そうでないグループに分け、各グループ個々人の発話データを活動の時系列のつながりという観点から記述し、質的に分析する。

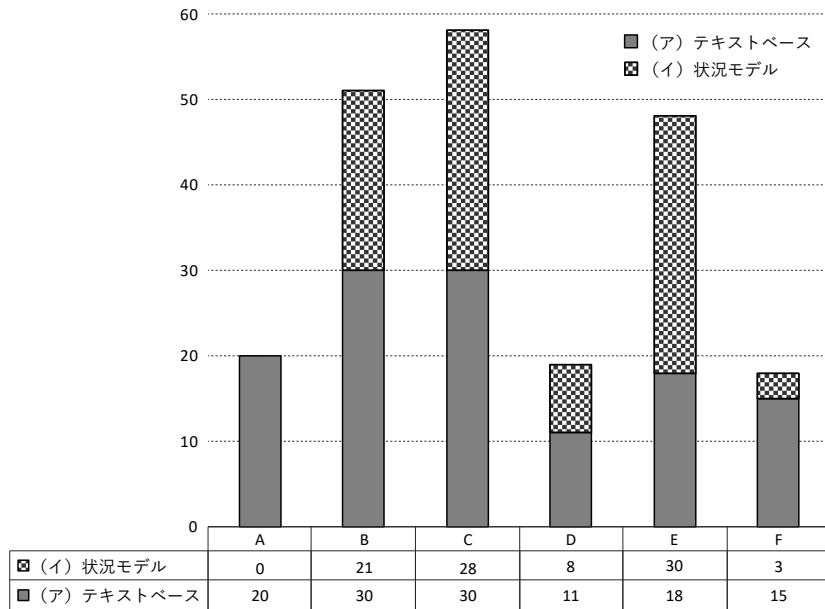


図1 (ア) と (イ) の発話の頻度

4. 読解過程の質的な分析

4.1 テキストベースと状況モデルに関わる発話が多いグループ

まずはテキストベースと状況モデルに関わる発話が48回以上見られるB, C, Eの発話から見ていくことにする。表4はテキストの最終部分の読解を行っているBの発話である。

表4 Bの発話例

No.	発話の日本語訳	活動の種類
B1	【音読 (たしかにロボットと対比すると, 人間とはそうした罪深い, アテにならない, 自分勝手な存在なのだろうと思います) 中国語訳】	読みと翻訳
B2	それはそうだけど,	同意
B3	でも, 人間ってそういうものだもん。そうじゃなければ人間と言えないんじゃないの。	批判
B4	つまり, 人々は自分なりの考え方を持っている。そうではないと, ロボットと区別がつかないでしょ。	批判
B5	ロボットには「感情」がないと思う。	批判
B6	【音読 (その代り思いがけなく崇高なことも行います)】	読み
B7	ここはよく書けている。	感想
B8	【B6の中国語訳】	翻訳
B9	【音読 (私はもう少し人間に期待をしたいのですが…)】	読み
B10	あ, だから, 最後に, やっぱり書き手は, 本当の癒しになれるのは人間だと人間のほうに期待しているんだ。	換言

Bは、テキストの音読と中国語訳を行ったあとで、読んだ内容に対する同意を示すが(B2)、その直後にその内容に対する批判的な意見とそれを補強する批判的な意見を述べ(B3-B4)、次いで「ロボットには感情がない」とロボットの欠点を挙げることで、人間よりもロボットに好意的な意見を述べる書き手に対して反論を試みている(B5)。その後、再び音読し、テキストの内容を「よく書けている」と感想を述べ(B7)、最後に書き手のメッセージを自分の言葉に言い換えて、書き手も結局は人間に期待しているということを確認している(B10)。このように、Bの一連の発話では、テキストの音読と中国語訳の合間に、テキストの内容に対する同意や感想の表明、書き手の意見に対する批判的な意見の開示、書き手の論点を自分なりの言葉で再構築する換言など、多様な活動を行いつつテキストの読解を進めている。

次に、ほぼ同じ箇所 of Cの発話を見てみよう(表5)。

表5 Cの発話例

No.	発話の日本語訳	活動の種類
C1	【黙読(でもロボットのほうが忍耐強く、忠実にいつも優しく反応してくれるし、裏切ったり、気が変わったりもしないそうです)中国語訳】	読みと翻訳
C2	確かにそうだけど、	同意
C3	しかしロボットと人間は違うのだ。	批判
C4	たとえ人工知能を高度に擬人化できたとしても、こまやかな感情やニュアンスを表現したり、ロボットにそういうものを持たせたりするのは不可能だと思う。	批判
C5	書き手はロボットの長所について述べると同時に	要旨
C6	ロボットの欠点を暗に示している。例えば無感情であることを避けられないといった点だ。	推論
C7	【黙読(たしかにロボットと対比すると、人間とはそうした罪深い、アテにならない、自分勝手な存在なのだろうと思います)中国語訳】	読みと翻訳
C8	ある意味でそうだけど、	同意
C9	ここの「罪深い」が何を指しているのかはピンとこなかった。	語句
C10	しかし、ロボットと人間はそれぞれ違って、ともに長所と欠点があることは大いに賛成だ。	同意
C11	【黙読(その代り思いがけなく崇高なことも行います。私はもう少し人間に期待をしたいのですが……。)中国語訳】	読みと翻訳
C12	書き手は人間に対してまだ期待を抱いているようだ。	換言
C13	ただ、書き手の人間に対する態度が変わり、	推論
C14	多少批判的に見ているように思った。	推論

Cはロボットの長所を述べるテキストを黙読し中国語に訳したあと、その内容に同意したうえで(C2)、ロボットの欠点を挙げて反論する(C3-C4)。しかし、Cは、書き手がロボットの長所を述べるだけでなく(C5)、ロボットの欠点を暗示してもいると述べ(C6)、書き手のメッセージがロボットの優位性を主張するだけの単純なものでないことを指摘している。その後、再び黙読と中国語訳と同意の後(C7-C8)、この箇所の語句「罪深い」の意味が「ピンとこない」と述べる(C9)。その上で、ロボットも人間も長所と短所があるというテキストの内容に賛同し(C10)、テキストの終わりまで黙読し、中国語に訳す(C11)。その後、テキスト末尾の文が書き手の人

間に対する期待を表しているようだ」と述べ (C12)、書き手の態度が変化し、人間を批判的に見ているという書き手に関する推論が述べられている (C13-C14)。

先に見たBの発話と同様に、Cもまたさまざまな活動を行いながらテキストを読み進めている。このデータで特に興味深いのは最後の発話 (C13-C14) である。Cはここで、「書き手の人間に対する態度が変わり、多少批判的に見ているように思った」と述べ、もう少し人間に期待したいと言いつつも人間に対して批判的な見方をしていると、書き手の気持ちに一步踏み込んだ発言をしている。すなわち、テキストには明示的に示されていない書き手の態度や心情を推測し、書き手の考えていることをより深く理解しようとする活動が観察されるのである。

次にEの例を観察したい。上で示したBとCの例はテキストの最終段落に関するものであるが、次に示すEの発話はテキスト全体の論の展開に関わるものである。

表6 Eの発話例

No.	日本語訳	活動の種類
E1	タイトルは「ペットと人間」だけど、ペットについては最初の2段落分だけしか述べられていない。	批判
E2	第一段落は書き手の友人がペットを亡くし、そのペットがどれほど大事だったか、いま日本にどれくらいペットがいるか、そして人間はペットと寄り添うことが必要だといったようなこと、そして、ペットがどれほどの経済的利益をもたらすか、それからロボットのことについて延々と語り始めている。	全体確認
	そして、後の方はタイトルと関係がないロボットのことを話し始めている。	
	そして、結果的にロボットとペットについて、あ、ペットについては言っていない。ロボットは必要としなくても構わないと言っている。	
	やはり、いや、必要としなくてもいいとは言っていないけれど、やはり人にもっと期待したいと言っている。身近に付き添ってくれるもの、家族や友人など生身のもののほうがいいと思っている。	
E3	タイトルとテーマ、書き手の主旨は実はなんなのか。	疑問
E4	なんか日本人はタイトルをつけるというもこうなるみたいだ。わたしたちがタイトルを付けるなら、自分の主旨と関係づけるけど。	一般化
E5	書き手がつけたタイトルは、第一段落の内容だけと関係があるのだ。	批判

表6は、Eがテキストの最後の段落を一気に黙読し、「書き手は、実は最後のところで自分の考えを言っている」と述べたあと、間を置かず話し続けている部分である。ここでEは、「ペットと人間」というタイトルが、テキストのはじめの2段落分の内容しか反映していないという問題点を指摘し (E1)、その妥当性を確認するため、もう一度テキストの第1段落目から要約を開始している (E2)。この箇所では長い休止なく話し続けていることから、テキストの一字一句をたどりながらではなく、ざっとスキャンしながら要約しているものと考えられる。次いで、疑問文の形でタイトルとテキストの主旨とが合致していないことを批判し (E3)、さらに、日本人のタイトルの付け方を中国人のタイトルの付け方と比較して批判的に述べ (E4)、書き手がつけたタイトルがこのテキストの一部分の内容しか反映させていないと批判的な意見を述べている (E5)。このようにEはテキスト全体をもういちど振り返り、「ペットと人間」というタイトルがテキストのタイトルとしてふさわしくないということだけでなく、日本人のタイトルの付け方に

ついて批判的な一般論を述べている。

以上、テキストベースと状況モデルに関わる発話を活発に行っている3名のデータからは、「テキストの翻訳→同意→批判→要旨→推論」や「テキストの全体確認→疑問→一般化→批判」など、多様な活動の連鎖が行われ、状況モデルに関わる心的表象が活発に構築されていることが読み取れる。

4.2 テキストベースと状況モデルに関わる発話が少ないグループ

次に、全般的にテキストベースと状況モデルに関わる発話が低調であったA, D, Fの3名のデータを観察する。4.1で述べたように、その種の発話が活発に行われている3名には状況モデルに関わる心的表象を構築する活動の連鎖が観察された。一方、全般的に活動が低調な3名にはこの種の連鎖がほとんど観察されず、状況モデルに関わる発話の出現が極めて限定されている。はじめにAの発話から観察する(表7)。

表7 Aの発話例

No.	日本語訳	活動の種類
A1	【音読(最近私の友人がペットロスからやっと立ち直りました)】	読み
A2	最初はペットロスの意味がわからず、ロスはペットの名前かと思った。しかし、“やっと立ち直りました”まで読んで、立ち上がるという意味、つまり、ペットの死から立ち直ったという、こんな感じだと思う。	語句
A3	【A1の中国語訳】	翻訳
A4	【音読(10年以上一緒に暮らしていた愛犬が死んでその喪失感から軽いうつ病状態になったのです)】	読み
A5	この文は簡単だ。	語句
A6	【A4の中国語訳】	翻訳
A7	【音読(ペットは、コンパニオンアニマルとも呼ばれていますが)中国語訳】	読みと翻訳
A8	「コンパニオンアニマル」の意味がよくわからない。外来語だけれど、意味が分からない、後で英語を思いつかな...	語句

Aは、テキストの音読を行ったあと(A1)、「ペットロス」という語の意味について述べ(A2)、中国語訳を行っている(A3)。それが終わるとすぐにその先を音読し(A4)、語句の難易について述べ(A5)、さらに中国語訳(A6)、音読(A7)、語句に対するコメント(A8)と続く。Aの発話はこのように「読み→語句→翻訳」あるいは「読み→翻訳→語句」というテキストベースに関わる単調なパターンの繰り返しで、その他にAが行っていた活動は「感想」が2回と「要旨」が1回だけで、すべての活動がテキストベースに関わるものに限定されている(表3)。

このようなAの発話に対してFの発話は、「要旨」が5回と他の5名の協力者に比べて「要旨」の発話数の多いことが注目される(表3)。表8にFの発話の一部を示す。

表8 Fの発話例(1)

No.	日本語訳	活動の種類
F1	【音読（癒しロボットは正確には、「メンタルコミットロボット」というようですが、アザラシの赤ちゃんをモデルにしており、目や足が動き、撫でると声を出して喜び、乱暴に扱われると怒ります）】	読み
F2	書き手はこのロボットを紹介している。	要旨
F3	これは実はメンタル面を慰めるロボットである。	換言
F4	“アザラシ”この単語は知らない。でも意味は理解できる。	語句
F5	【F1の中国語訳】	翻訳
F6	【音読（パソコン二台分ほどの容量を持つ人工知能を埋め込まれているので、頻繁に呼ばれる声を自分の名前として認識でき、名前を呼ばれると反応します）】	読み
F7	ワー！映画みたい。	感想
F8	【F6の中国語訳】	翻訳
F9	【音読（重さは約2.7キロ、新生児の体重とほぼ同じです）中国語訳】 【音読（1993年から研究開発が始まり、性能や抱き心地など改良を重ねています）中国語訳】 【音読（また高齢者や長期入院の人のリハビリを助け、精神を病む人たちにもアニマルセラピーとして効果を上げているそうです）中国語訳】	読みと翻訳
F10	今語っているのはこのロボットの性能についてだ。	要旨

この箇所では、Fはテキストを音読し、その内容を「書き手はこのロボットを紹介している」とまとめている（F2）。その後、「換言」「語句」「感想」を差し挟みながらテキストの音読や中国語訳を行い（F3-F8）、それから後もしばらくは音読と中国語訳を繰り返す（F9）。そして「今語っているのはこのロボットの性能についてだ」と直前に読んだテキストのトピックを確認している（F10）。Fの場合、このようにところどころでトピックを確認したり内容をまとめたりしながらテキストを正確に読み取ろうとする様子がうかがえる。

以上のように、FはAより多様な活動を行い、自分の言葉を用いてテキストの内容を正確に理解しようと心がけている。しかし、Fの活動の多くはテキストベースに関わる発話に留まり、状況モデルに関わる発話にまでは発展しない。以下の表9で、Fが状況モデルに関わる発話を行った数少ない例を観察する。

表9 Fの発話例(2)

No.	日本語訳	活動の種類
F1	【音読（でもロボットのほうが忍耐強く、忠実にいつも優しく反応してくれるし、裏切ったり、気が変わったりもしないそうです）】	読み
F2	でも、書き手はここで、ロボットのメリットという話題に急に変えた。	論の展開
F3	【F1の中国語訳】	翻訳

表9は、Fが論の展開の仕方についてコメントしている部分である。この発話を表6のEの発話と比べるとその違いがはっきりする。Eはタイトルについて批判的な意見を述べるだけでなく（E1）、その妥当性を確認するためにテキスト全体の内容を再確認し（E2）、その上で再度疑問を提示する形で批判を加え（E3）、さらには日本人のタイトルの付け方一般に関する自説まで述べ

ている (E4)。このように、E はテキストの内容を慎重に確認し、自説を補強しながら独自の議論を發展させている。それに比べて表9のFは、書き手が話題を急に変えたことを指摘しているものの (F2)、それ以上の議論の發展が見られず、音読した部分の中国語訳を行うだけで (F3) 次のテキスト読解に移ってしまう。この場面を含めてFには状況モデルに関わる発話が3回見られたが、いずれの場合もその場限りで、それ以上の發展にはつながらない。AとFの両者に共通するのは、テキストを正確に読み取るということ志向し、それ以上の深い読みへの活動が希薄だという点である。

以上、複雑な活動の連鎖が観察され、状況モデルに関わる発話が活発に行われているB、C、Eと、「読み→テキストベースに関わる発話→翻訳」といった単調なパターンへの繰り返しが大半を占め、状況モデルに関わる発話がゼロないしはほとんど行われていないAとFの発話を分析した。最後に、残る1人であるDの発話を見ることにする。

Dには状況モデルに関わる発話が8回観察される。そして、そのうちの5回は「意見」や「批判」や「疑問」という形で自説を述べている点が注目される。表10はDの発話の一部である。

表10 Dの発話例

No.	日本語訳	活動の種類
D1	【黙読 (でもロボットのほうが忍耐強く、忠実にいつも優しく反応してくれるし、裏切ったり、気が変わったりもしないそうです)】	読み
D2	でも確かに、ロボットは多くのメリットがある。	同意
D3	人と付き合う場合はいろいろなことに気を配らなければならない、相手の気持ちを考えなければならない。また人には裏切られたりもするが、ロボットの場合はそんなことない。	換言
D4	しかし、ロボットはぶっきらぼうだし、感情を持っていない。	批判
D5	【黙読 (たしかにロボットと対比すると、人間とはそうした罪深い、アテにならない、自分勝手な存在なのだろうと思います。その代り思いがけなく崇高なことも行います。私はもう少し人間に期待をしたいのですが……)】	読み
D6	この最後の文はとても悲しい。	感想
D7	ロボット開発が進んだとしても、人々は期待を失うべきではない。	意見
D8	でも、確かに近年の人工知能の発達を考えると、もしある日、機械が本当に人間に取って代わるようなことがあったら、どんなことになってしまうのだろうか。	疑問

ここでDは、テキストを黙読したのち、ロボットの長所を述べる内容に同意し (D2)、黙読した部分を自分の言葉で言い換えてその内容を確認している (D3)。次いで、ロボットの短所を指摘することでテキストの内容に反論する (D4)。次に、再び黙読を始め (D5)、最後の一文が悲しいと感想を述べたあとで (D6)、ロボット開発が進むことで希望を失うべきではないという意見を述べ (D7)、疑問の形で人間が機械に取って代わられることへの警告を発している (D8)。このように、ここでは「読み→同意→換言→批判」や「読み→感想→意見→疑問」といった活動の連鎖が観察される。しかし、この種の連鎖が観察されるのは表10に示した箇所だけで、その他では「意見」が2回観察されるものの、そこからさらに論を發展させることなく、散発的に自説を述べるだけで終わっている。Dの読解に要した時間は6名中最短の8分59秒で、平均時間

の14分24秒を大幅に下回っている(表2)。このことから分かるように、Dの場合は自分自身の考えを深めるというよりは、テキストの内容を読み取ること志向しており、その点ではAやFと同じく、基本的にテキストベースに留まる読み方をしていると言える。

以上、6名の協力者の読解過程における活動を時系列に沿って観察した。その結果、状況モデルに関わる発話を活発に行うグループでは、複雑な活動の連鎖が数多く見られたが、テキストベースに関わる発話に留まりがちなグループのほうは、そのような連鎖がほとんど見られず、状況モデルに関わる端緒的な活動が行われたとしても、それ以上深い思考に繋がるような展開がないまま終わっていることが分かった。菊池(2006)は、読解力の高い学生に各種の「ストラテジー連鎖」が観察されると述べているが、本稿の調査でも、B、C、Eの3名には各種の活動の連鎖が観察された。その一方で、A、D、Fの3名は、状況モデルに関わる発話が少ないということだけでなく、活動の連鎖という点でも限られたものしか観察されなかった。以上のことから、A、D、Fは、B、C、Eに比べ読解の進め方に問題があると言わざるを得ないことが分かる。

5. 事前に与えた設問の効果

最後に、事前に与えた設問が思索を深める読解を促すことに効果があったかどうかという点について考えたい。すでに述べたように、本調査では、書き手との対話を促すことと、他者への伝達目的を意識させることにより、より深い読みを誘発する目的で、以下に再掲する設問を協力者に提示してから読解を開始した。

- 1) 書き手は何を言おうとしているのですか。
- 2) それはテキストのどこから分かりましたか。
- 3) 書き手と話し合う機会があるとしたら、あなたは書き手にどんなことを言いたいですか。
- 4) この文章を読んだことのない人と分かち合いたいことは何ですか。

結果としては、テキストベースに関わる活動に留まり、状況モデルに関わる活動が希薄であったAとFや状況モデルに関わる端緒的な活動が行われてもそれ以上の思索には発展しなかったDの存在から、協力者のうちの半数にとっては設問が十分な効果を発揮しなかったと言える。ただし、これらの協力者たちも、読解後に行ったグループ討論の際には、設問を検討する中で自分の読み誤りに気付いたり、より深い考察に基づくコメントを行ったりしている。そのため、設問の効果が十分でないというのは、あくまでも読解過程に限ってのことである。そのことを踏まえた上で結論を述べるなら、読解を進める過程で状況モデルに関わる読み方を促す効果は、今回のように、単に事前に設問を提示するだけでは十分に発揮されないことが明らかになった。

このような結果を招いた原因のひとつは、読解の目的や進め方に関する十分な説明や練習を行わず、設問を提示しただけで読解を開始したため、読解後のグループ討論の時まで設問への回答を保留できるかのような状況を与えてしまったことにある。そのことにより、協力者たちはテキストを読む過程で設問の内容にさほど注意を払わなかった可能性がある。しかし、同じ条件下にもかかわらず、半数にあたる他の3名は、状況モデルに関わる発話を数多く行っていたことも事

実である。このことは、事前の設問のあるなしに関わらず、協力者たちの普段の読み方が今回の調査の結果に影響した可能性があることを示している。協力者は、全員が日本語学や日本語教育を専攻する日本語能力の高い学習者である。この種の学習者ですら読解過程で状況モデルに関わる活動が十分に行われない可能性があるということは、読解を行う際に、単に設問を与えるだけでなく、読解の目的や設問を与えることの意味を十分に理解させ、読解過程で設問を思い起こしつつ読む練習を行うなど、読み方に関するなんらかの指導が大学院レベルの学習者においても必要であることを示唆している。

6. おわりに

本稿では、中国語を母語とする上級レベルの日本語学習者が、比較的易しいエッセイを読むときにどのような読み方を行っているのかを調査し、読解時の時系列に沿って生じる様々な活動のありかたを分析した。協力者の数が6名という限られた人数ではあるが、彼らは全員が高度な日本語力を有する大学院生であるという点では共通している。このような協力者の間でさえも状況モデルに関わる発話を活発に行うグループとテキストベースに関わる発話にとどまりがちなグループに大きく分かれたことは、書き手との対話を促し、自己の思索を深めるような読解の力を養うには、大学院レベルの学習者であってもなんらかの指導が必要であることを示している。さらに、本稿が行ったように事前に設問を与えるだけのやりかたでは、読解過程での深い読みを促すには不十分であることが示された。今後は読解後のグループ討論の分析を行い、その結果も踏まえた上で、設問提示が読解に与える効果や、グループ討論での議論の深まりと協力者それぞれの読解過程で見られた特徴との関連を検討していきたい。

テキストに書かれている内容を吟味し、書き手が言おうとしていることと自分の考えとをすりあわせ、自問自答を行ったり、書き手に異議を唱えたりしながら自己の思索を深めていく批判的な読み方は、日本語学習者だけでなく、日本語の母語話者にとっても求められるものである。そのような高度な読解力を養うためにどんな指導が必要なのか、国語教育での実践も参照しつつ、さまざまな方法を試みていきたいと思う。

参考文献

- 内田伸子 (1982) 「III. 文章理解と知識」佐伯胖『認知心理学講座第3巻 推論と理解』158-179. 東京：東京大学出版会。
- 柏崎秀子 (2010) 「文章の理解・産出の認知過程を踏まえた教育へ—伝達目的での読解と作文の実験ととも—to」『日本語教育』146: 34-48.
- 菊池民子 (2006) 「よい読み手の読解過程に見られる特徴—ストラテジー連鎖の視点から—」『言語文化と日本語教育』31: 1-10.
- 徐芳芳 (2015) 「中国語を母語とする中級日本語学習者の文章理解に及ぼす説明予期の効果—読解前指示を操作した実験的検討—」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 文化教育開発関連領域』64: 177-186.
- 砂川有里子 (2015) 「書き手と読み手の対話」『ヨーロッパ日本語教育』20: 8-18. (<http://www.eaje.eu/ja/symposium/25>)
- 館岡洋子 (2001) 「読解過程における自問自答と問題解決方略」『日本語教育』111: 66-75.
- 野田尚史 (2019) 「読んで理解する過程の解明—「読解コーパス」の開発—」野田尚史・迫田久美子編『学習者コーパスと日本語教育研究』23-42. 東京：くろしお出版。

- 野田尚史編 (2020) 『日本語学習者の読解過程』 東京：ココ出版。
- 野田尚史・花田敦子・藤原未雪 (2017) 「上級日本語学習者は学術論文をどのように読み誤るか—中国語を母語とする大学院生の調査から—」 『日本語教育』 167: 15-30.
- バフチン, ミハイル著・桑野隆訳 (1989) 『マルクス主義と言語哲学【改訂版】』 東京：未来社。
- 霍沁宇 (2015) 「「三つの対話」を用いた読解授業における日本語上級学習者の読み方の意識変容プロセス」 『日本語教育』 162: 97-112.
- 霍沁宇 (2016) 「「三つの対話」を用いた読解授業における日本語上級学習者の読み方の意識変容プロセス—2名の非漢字圏上級学習者を中心に—」 『一橋日本語教育研究』 4: 147-156.
- 藤原未雪 (2017) 「上級日本語学習者による学術論文の読解における語義の解釈過程」 『一橋大学国際教育センター紀要』 8: 119-132.
- 山田裕美子 (2016) 「設問タイプの違いが読解中のストラテジー使用に与える影響—中級日本語学習者を対象に—」 『一橋大学国際教育センター紀要』 7: 57-69.
- 楊秀娥 (2018) 「日本語ピアリーディング授業における学習者の批判的思考の活性化」 『国立国語研究所論集』 14: 323-345.
- van Dijk, Teun A. & Walter Kintsch (1983). *Strategies of Discourse Comprehension*. New York: Academic Press.

関連 Web サイト

日本語文章難易度判定システム。 https://jreadability.net/sys/terms_of_use?lang=ja (2020年5月1日確認)

【資料】

ペットと人間

最近私の友人がペットロスからやっと立ち直りました。十年以上一緒に暮らしていた愛犬が死んで、その喪失感から軽いうつ病状態になったのです。ペットはコンパニオンアニマルとも呼ばれていますが、生活に潤いを与えるだけでなく、人生の伴侶であり、家族の一員なのだなと感じました。

現在の日本では犬は千三百万匹以上、猫は約千二百万匹飼われており、十四歳以下の子供の数より一千万匹近く多いそうです。たしかに私の通勤途中でもブランドのファッションを身につけた珍しい種類の犬を連れて散歩している人にたくさん会います。

子供を育てるのは責任が重くてお金もかかり難しい、孫はいないか遠くに住んでいる。けれど、**人には愛情の対象が必要**なのです。ペットフーズ、ペットのファッションや美容だけでなく、ペット飼育可のマンション、ペットの医療保険、ペットの葬儀屋さんなど、ペット向けのサービスがどんどん成長していて、今や二兆円に迫ろうという勢いだそうです。

先日は「癒しロボット」を直接見て、触って考えさせられました。癒しロボットは正確には、「メンタルコミットロボット」というようですが、アザラシの赤ちゃんをモデルにしており、目や足が動き、なでると声を出して喜び、乱暴に扱われるとおこります。パソコン二台分ほどの容量を持つ人工知能を埋め込まれているので、頻繁に呼ばれる声

を自分の名前として認識でき、名前を呼ばれると反応します。重さは約 2.7 キロ、新生児の体重とほぼ同じです。

一九九三年から研究開発が始まり、性能や抱き心地など改良を重ねています。また高齢者や長期入院の人のリハビリを助け、精神を病む人たちにもアニマルセラピーとして効果を上げているそうです。特別養護老人ホームやデイケアセンター、小児病棟や児童養護施設、高齢者の家庭でも愛されているそうです。アルツハイマー病の高齢者のセラピーには効果があることが確認されています。

癒しロボットは、一体三十五万円と安くはありませんが、将来の需要は大きいと見込まれています。日本の人工知能にかかわる高度技術と細やかな美的感覚は、今後さらにかわいく賢いロボットを生んでいくに違いありませんから、輸出産業になるとも期待されているそうです。「AIBO (アイボ)」という歩行型ロボットも制作されていますから、人間の形をしたロボットが開発され、話し相手や相談相手、遊び相手を務めるロボットが生まれる日はそれほど先でないでしょう。

私は本当の癒しは家族や友人のような身近な人から得られる、孫がいなければ友人の子でも近所の子でも可愛がってあげればいいし、愛情を必要としているけれど得られない人たちには、地域やサークルなど有縁の人がボランティアとしてかかわっていくべきだと考えていました。でもロボットのほうが忍耐強く、忠実にいつも優しく反応してくれるし、裏切ったり、気が変わったりもしないそうです。たしかにロボットと対比すると、人間とはそうした罪深い、アテにならない、自分勝手な存在なのだろうと思います。その代り思いがけなく崇高なことも行います。私はもう少し人間に期待をしたいのですが……。

坂東真理子『錆びない生き方』

The Reading Process of Advanced Japanese Learners in China: Reading Instructions that Promote Dialog with Authors

SUNAKAWA Yuriko^a ZHU Guirong^b

^aProfessor Emerita, University of Tsukuba/

Invited Professor, JSL Research Division, Research Department, NINJAL

^bBeijing Center for Japanese Studies, Beijing Foreign Studies University

Abstract

To provide reading instruction that helps learners to deepen their thoughts via reading, it is necessary to observe how they read and identify the difficulties they face when reading. The purpose of this article is to investigate the process by which Japanese learners read a Japanese text, and analyze how they construct “text-based” representations and “situation model” representations (van Dijk & Kintsch 1983) while reading.

The subjects of the research are six graduate student Chinese speakers with advanced Japanese ability. Before they started reading, they were given four questions and instructed to discuss these questions after they finished. We designed these questions to promote dialog between readers and writers so that they deepen their thoughts during reading. As a result, we found that three subjects were active in both “text-based” and “situation model” activities. However, the other three subjects devoted themselves mostly to “text-based” activities and had little access to “situation model” activities. The results show the possibility that half of the six learners have failed to construct enough “situation model” representations. Thus, we propose that it is necessary to make the learners fully understand beforehand the purpose of reading and offer them sufficient practice so that they can recall the given questions while reading.

Keywords: reading process, dialog with writers, text-based, situation model, reading instruction